



須坂市立旭ヶ丘小学校 校長室より

令和2年1月17日

あすなろ

No.1

堀 紀美子

今年もどうぞよろしくお願ひいたします。
おかげさまで3学期を無事にスタートしました。



地域の方々に見守っていただき感謝です。

地域の方々から昨年末に次のような声をお寄せいただきました

「12月17日(金)の朝、7時45分頃、ゴミ出しのため、ごみ袋を引きずってゴミステーション近くまで歩いて来たところ、こちらをじっと見ていた小学校1年～3年位の男の子が近寄ってきました。そして、ゴミステーションの戸を開けてくれ、ゴミを持ってくれ、ゴミ出しを最後まで手伝ってくれました。朝の通学の途中と思われ、時間がないのに、あまりに親切な子供で涙が出ました。」

「12月に男の子が、ゴミステーションの前を通過しようとしていました。その時に自分の後ろをゴミ袋を持ったおばあさんが歩いていることを思い出したのか、その子がさっと振り返り、積まれているゴミ袋を覆っている網をすくい上げ、おばあさんがゴミ袋を出しやすくしてくれました。この時、おばあさんは『ありがとう』と何度もお礼を言っていました。その子は当たり前のことをしたかのように、登校していきました。朝の寒さも忘れるような温かい気持ちになりました。」

3学期の始業式では、この話を全校に伝えました。おかげさまで子ども達も職員も、いつも励ましていただいていることに感謝して、これからもっとがんばろうという気持ちをもちました。ありがとうございました。また始業式では、全校で「自分で気づく・自分でどうするか考える・自分から動く」ことをいつも意識し、48日間という短い3学期を「時間を大切に」過ごしていくことを確認しました。

3学期の初日、1年生の教室では、新しいけいさんドリルノートへ一生懸命に自分の名前を書く姿。他の教室でも、席替えや係決め、そして自分のめあてを決める姿が見られ、3学期の活躍がとても楽しみにになりました。



旭ヶ丘小50周年『校歌』の歌詞

本校は、今年50周年を迎えます。記念誌「10周年のあゆみ」を読むと、開校当時の多くの方々の思いやご苦労が伝わってきて感動することが多くあります。

昭和46年6月1日に開校、学校生活がスタートしました。この頃、新しい校舎は大変に立派なものでしたが、グラウンドは石ころだらけで、校舎の周りに木の緑はなく、草の青さだけが目につくような状態でした。その後だんだんとプールや体育館もできてきましたが、校歌はまだありませんでした。校歌の代わりに「あすなろ」を歌っていたそうです。

開校して2年目の夏頃に「校歌を作ろう」という話がでるようになりました。ところが、どうやって作ればいいのかとても悩んだそうです。音楽の専門家に作ってもらおうか、町の人たちから募集しようか。どちらも問題があり、頼むことができませんでした。そこで、当時の山崎校長先生の提案で旭ヶ丘小学校の先生方で作ることにしたそうです。

**そして、校歌の候補として考えてくださった歌詞が巻物のような長い紙に書かれて残っていました。(右の写真)
一昨年の3月に校内で見つかりましたが、そこには、7つの歌詞が書かれていました。**

当時の先生方が、旭ヶ丘小学校の子どもたちに、希望と期待をこめて一生懸命に考えてくださったことが伝わってきます。

そのうちの一番最初に書かれている歌詞の中に、
「われらののぞみただひとつ

精一杯自分の花を咲かせよう」

という一節があります。まさしく本校の学校教育目標です。

そして、その7つの中で一番最後に書かれているものが、校歌の歌詞となっています。

「石をほり 草木を植えて」

学校ができてからの数年間、先生方やおうちの方々、地域の方々がグラウンドの石を掘り出したり、木を植える穴を掘ったり、また子どもたちも一緒に石ひろいや草木の水くねなど、緑に囲まれた学校にするために一生懸命に汗を流してくれたことがわかります。

この校歌を発表した時には、来賓の皆様から「新しい学校にふさわしい大変良い校歌ですね。」とお褒めの言葉をいただき、先生方や子どもたちも感激で胸がいっぱいになったそうです。

この学校が多くの方々の努力によってできたこと、旭ヶ丘小学校の子どもたちに「精一杯 自分の花を咲かせてほしい」という強い願いがこめられていることを忘れずに、この校歌を歌っていこうと子どもたちに話をしました。

7つの歌詞は額に入れて、校長室に飾ってあります。どうぞ校長においでいただき、ご覧いただければ幸いです。

